

「もとはこちら」のお話し

№53 今月のテーマ

不生不滅の 我が命



もとはこちら会・世話人 平井謙次

始めもない
終わりもない
永遠なる自分

というものを自覚するということ、
気づくということが、人生最大の目的である

著書「自己を生かす道」より

北原ゆり筆

突然ですが、「あなたは何のために生きていますか」と聞かれたとしたら、さてあなたは一体何とこたえるでしょうか。

「何のために生きるのか」というような名前の本も色々出ていますが、幼い子供がこういう事を考える事は殆どないと思います。それと共に、魂の幼い人も多分こういう事を考える事もなく、自分に与えられた日々をただそのままに生きていく事でしよう。

しかし精神的にも肉体的にもある程度の年齢に達した人は、ある時ふと立ち止まるのではないのでしょうか。自分は今まで一体何のために生きてきたのだろうか。そしてまたこれから先、自分は何のために生き、これからどこに行くのだろうか。

生まれてきて、喜んだり悲しんだり、泣いたり笑ったり、病気になったり健康になったりしながら私達が生きていくその理由、それは間違いなく、自分が生まれてきたからです。

それでは改めてもう一度、では一体何のために生まれてきたのかと問えば、答えは人それぞれでしょうが、しかしそれら全ての答えに共通して言えることは、それは「幸せになる為」以外にはない筈です。

私達が生きている間に抱くあらゆる悩みや苦しみも、その元をただせば幸せになる為の苦しみであり、或いは幸せになれないための悩みや苦しみである筈です。

ですから世の中には今ざっと七十億ともいわれる人々が生きておりますが、その中のただの一人として「自分は不幸になれない」といって苦しんでいる人もなければ、「自分がもっと不幸になる為には、一体どうすればいいのだろうか」と悩んでいる人もいないはずで。

私達のあらゆる思い、あらゆる行為のすべては、自分が幸せになる為にあるという事です。幸せになる事以外に、私達の生きる目的などは、どこにもありません。

なぜ誰でも それを知っているのか

しかしこの幸せという事も、たとえ今がどれ程幸せであつたとしても、それはこの度の大震災の事を通してでも本当によく分かるのですが、幸せは一瞬にして想像を絶するような不幸な状態に変わる事もあります。ですから今ある幸せに、明日の保障などはどこにもありません。それが私達の現実です。明日はどうなるか誰も分からない揺れ動く幸せと不幸せの間で、それでも全ての人が幸せを求めながら、今という時を、そして今日という日を懸命に生きているのです。

では私達が求めるところのその「幸せ」とは、一体何なのでしょう。

ロシアの文豪トルストイは、「不幸な家庭には様々な形があるが、幸福な家庭はどれも似たりよつたりで、みな同じような姿をしている」と書いています。

この場合、彼は家庭の幸せという事を言っておりますが、ただ単に家庭の幸せだけではなく、個人における幸せや社会における幸せという事についても、私達は誰でも幸せとはどういう状態を指しているのかという事を知っており、そして全ての人がその方向に向かって行こうとしています。しかし改めて考えてみれば、「幸せとはどういう事なのか」という事を、私達は誰に教えてもらったわけでもないのに、全ての人がそれを知っているというこの事は、実に驚くべき事なのです。

私達はなぜ、幸せとは何かという事を、一人残らず全ての人が知っているのでしょうか。それは私達の本質が幸せであるからです。

私達が幸せになろうとするのは、例えばあの鮭が生まれ育った川に意識的無意識的に戻って行こうとするのと同じ様なものであり、私達は元々幸せそのものであるから、幸せな状態に戻って行こうとするのです。そしてまた全ての人が、その元もとの幸せな状態をこの現実の生活の中でも表わしたいという絶対の思いを持っているからこそ、私達は生活の中に幸せを求め続けるのです。

確かに私達が心に思い描く幸福の姿というのは、どれも似ていま

す。喧嘩や争いもなく、今日よりもっと素晴らしい明日という日を目指して、全ての人が夫々の立場で家族や仲間と協力し合い、助け合いながら希望を持って生きていく、そういう事を幸せといい、そしてそういう幸せがずっと続く事を誰もが強く望んでいる筈です。そして深い心で知っているそういう幸せな映像と、思う様にならない現実の間で、私達には様々な悩みや苦しみ、葛藤などが生まれてくるのです。もしも私達の本質が幸せではなく不幸であり、幸福などというものを初めから知らなければ、悩みや苦しみが生じる事もないはずですし、また私達が幸福を求め、幸福になるための努力をするような事も起きない筈です。

不安な生活

ところでいま私達は激しく変化する生活の中で、右に行くか左に行くか、道しるべのない岐路に立たされ、「さあ、どちらに行くか」と答えを迫られている状態です。

例えば原発を推進すべきか止めるべきか。或いはまた、どこまでも際限なく遺伝子操作による不妊治療などを進めても良いのか悪いのか。そしてまた脳死の人からの臓器移植問題など、誰もが幸せを求めつつも、何を頼りにどう考え、どう生きたらいいのかという判断に迷い、とりあえずは法律を創って一応の方向を決めながらも、これで間違いないという確信が持てず、誰もが及び腰で歩いてような状態です。

そこに地球規模での大災害が世界各地で連発し、今このわが国でも、かつて経験した事がない程の大災害に見舞われています。自然災害に人的災害も加わり、明日のわが身はどうなるのかという、本当に押しつぶされそうな大きな不安に直面しているのです。

ところでいつの世もそうですが、混乱した不幸な時代になればなる程、目の前の苦しさや不安から救われたいとの想いが強くなり、宗教に救いを求める人が多くなります。そこで「信じるものこそ救われる」ということで、とりあえず神や仏の存在を信じ、守られている自分を意識する事によって、生きる勇気を奮い立たせ、現実の



苦しさに立ち向かって強く生きようとするとする人も多いのです。

しかしその一方で、論理的な人、いわゆる知性派といわれる様な人達は、むやみに神仏の存在を心の底から信じ込む事もできず、結局は現実的な金や物や地位などに価値を置き、それらの中にある幸せを信じて生きるような事になるのです。

しかしそのような目に見えるもの以外は信じないという唯物的な生き方も、結局は心の底からの幸せは得られないと気付いた一部の人は、一応の科学や物理なども学んだ若者までもが、科学を騙^{かた}つたオカルト的な偽宗教に引きずり込まれる様な事になり、世の中を震撼とさせる事件を引き起こすような事になったのも、まだ記憶に新しいところです。

生き通しの命

こんな時代に、はつきりと私達の行く方向を指し示してくれている素晴らしい言葉があります。それが「もとはこちら」という言葉です。



この「もとはこちら」という言葉を遺された平井謙次先生は、重度の心臓病の中にあつて、なぜ、自分はこんなに不幸なのだろうか」と、悩み苦しんでおりました。

そして自分にとってはこの心臓病という病気こそが諸悪の根源であるとして、その病気を治す為に、断食やヨガ、食養などの肉体面だけではなく、過去からの生き方や心のあり方なども含め、あらゆる面にわたって「自分」というものに向き合い、深く、深く自分を掘り下げ見つめられました。

そして長い断食を伴う座禅の末に、ある時、「生き通し・死に通しの本当の自分」というものと劇的な出会いをされたのです。それらは、NHKのテレビやラジオの宗教の時間などを通じて、日本中に何度も紹介されましたから、お聞きになられた方も沢山いらっしゃると思いますが、この平井先生は正覚を得られた後、「この心臓病こそが、自分を救ってくれた神仏からの最高の賜りものである」と断言されるまでにまで至りました。

そして「条件によって、例えば、金持ちになったり貧乏になったり、健康になったり病気になったり、あるいは生きたり死んだりする事で、要は条件次第で幸福になったり不幸になったりするような、そんな頼りない幸せではなく、何があっても、たとえどのような事が身の上に起こってきても、『自分は幸せだ』と胸を張って言える、そういう絶対の幸せを命がけで求めよ」と言われました。

そしてそうなる為には、この肉体のある現実の世界だけではなく、肉体の生死を越えて永遠無限に生き続けている「もう一人の自分」「本来の自分」というものに、はつきりと出会う事が必要だと言われました。

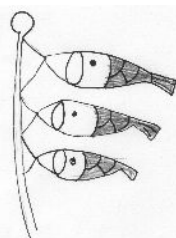
そしてご自分が体得された、「生き通しの、絶対幸福そのものの、本来の自分」という立場に立つて、では私達は現実的にどう生きたら本当の幸せに出会えるのかという事を教え続けて下さったわけです。

そして悟りの瞬間に感得されたことを、「もともこちら そのままぜんぶあたりまえ ただありがたく すみません」という短い言葉にしてのこされました。

偶然はない

この言葉の意味するところについては、何冊もの本になっておりますので、是非一度お読み頂きたいと思いますが、とにかく自然の世界には偶然という事は一切ないという事です。そして自然の世界の出来事全てが必然の連続であるように、私達一人ひとりの人生もまた、全てが必然の連続であるという事です。

ですから自分が体験した事のその原因は、すべて自分の中にあり、偶然とか、運が悪いとか誰かのせいであろうな、などという事は絶対にないという事です。もし仮に、人生には偶然の出来事があると思っていったり、運の良し悪しがあるという様な考え方で生きているとすれば、それは自然の法則に反する間違った考え方生き方であるために、たとえ一時は幸せのような状態になったとしても、その幸せが安定し、長続きする事はまずありません。



ですから自分が体験した事は、それが気にいった事であろうが気にいらぬ事であろうが、全てが自分にとつては当然の出来事であり、必然の結果であるという事を深く知ることが大切なのです。

そして「肉体の生死を越えて生き続けている、本当の自分」の存在を深い心で感得し、自分が体験した一切全ての事は自分が招いた事であり、同時にそれは神仏からの最高の贈り物である事を知って、人生を肯定的に送る人は、必ず今よりももっと安定した幸せな方向に向かう事ができる様になるのです。なぜならば、今のそういう摂理に従った考え方生き方が、人間本来の姿である絶対の幸せな状態に私達を戻し、あるいは導いてくれる事になるからです。

本来宗教を学ぶという事は、ものごとの本質を深く知るところとです。そして自然の摂理の中から、人間の本質である不生不滅のわが命というものはつきりと観てとつて、その結果、「人生に何が起ころうと、生きようが死のうが、絶対に大丈夫なのだ」という安心立命の境地を得て、摂理に従って幸せに生きるという事にあるのです。

ところが似非(えせ)宗教による間違つた教えは、今日の前にある不安や恐怖から逃れさせるために、更なる恐怖を連想させてパニックに陥らせ、自分が作り出したそれらの妄想、恐怖から逃れる為には、この宗教を信じて付いて来る以外にはない、等と教えるのです。「信じるものこそ救われる。教団から離れたらすれば、更なる不幸が付きまとう」等と言われ、人間の本来である自由を奪われ、恐怖でがんじがらめにされ、幸福どころかより一層不幸な状態になつてしまう様なことになるのです。

ですから「何を信じるか」という事を、私達はいつも問われているのです。信じるものは永遠の命の存在であり、私達はもともと幸せな存在であり仲間であり、誰もが同じひとつの命を基に共に生きていくという事です。

摂理通りの 最高の人生

物質世界に生きる肉体には、始めもあれば終わりもあります。



それが自然の摂理です。摂理から逃れる事は、誰も出来ません。しかしその肉体を作り出した命には、始めもなければ終わりもないというのまた間違いのない自然の摂理です。

私達は命そのものを観る事はできません。私達が観ているものは、命が働いたその結果の影だけです。

この度の災害によつてなくなつた多くの方々も、肉体はなくてもその命は今も生き続けており、必ずまた新しい肉体衣を身に付けて、次の新しい人生を歩み始められる事になるのです。そしてこれらの方々は、多分この世に生を受けた時よりも、次は一段と幸せな人生を送られる事になるだろうと私は確信しています。

なぜならば、彼らは私達に原発の危険性や決して自然を侮つてはいけないという事、そして皆で助け合う事の大切さや、明日に希望を持つ事の大切さなど、本当に貴重な教訓を沢山残して下さつたからです。命を投げ出してのそういう大きな功績が、彼等自身の魂を輝かせ、彼らにはその輝きにふさわしい次なる幸せな人生が約束されている筈です。自分の行いによつて、より幸せな人生へと導かれるのは自分であり、導くのもまたこの自分です。

今日という日が終わつても、必ず明日という日があるように、私達の命にも始めもなければ終わりもありません。この肉体は滅びても、新しい肉体衣を着けた新しい人生がまた始まるのです。運の良い人生もなければ、運の悪い人生もあります。全ての人々が、夫々の過去の生き様に最もふさわしい、その人らしい当たり前の最高の人生を生きているのです。

【ご案内】

五月の勉強会は、五月七日(土)午後七時からです。

次回は、六月四日(土)午後七時からを予定しております。皆様のご参加を、お待ちしております。

編集発行人

もとはこちら会 資料編集部 北原友也

専用HP

<http://www.motoha-kochira.com>

mail: data3@motoha-kochira.com